



今回は新聞切り抜きが4枚(前号の後半⑤⑥⑦⑧)になったので前半・後半に分けて送付します。

・・・以下の文章は前回の挨拶です。

●まもなく10月。秋に入るところですかね。

ここ鹿児島は10月はまだ半袖が多いです。オシャレには鹿児島は適しません。チョッキ?なんという衣類は不用ですから。

さて、楽しかった八期旅行も終わりました。次を続けるかどうか??

島津義弘没後400年のシリーズ①②③④お届けします。

更に勉強したい方は山本博文の『島津義弘の賭け』をお勧めします。中公文庫です。

桐野作人の『島津義久』もちょっと固いけどおススメです。

尚、八期仲間の隈元達雄クンのブログクマタツ日記でも(というよりこちらのブログの方が)島津四兄弟を知るにははるかに良いかも知れません。

<https://plaza.rakuten.co.jp/kumatake123/> 「じーじの南からの便り」をクリック。

西山レポート9月号{モバイルかキャッシュか?}添付します。

●以下は今回の「四国旅行」のYouTubeにUPした動画です。

以上9月号のメッセージ大石

<https://youtu.be/tq9qBuTanHs>

●昨日は四男島津家久の子『豊久』のルーツを訪ねて、古市庄八郎くんを隈元くんが案内する1日旅をして来ました。南薩方面です。 大石

● 今日のような話題は普通の歴史の勉強では出てきません。以前にも書いたと思いますが、新聞記者は多角的に物事を見ているのだなと、教えられることが多いです。私は。

島津義弘は奥方にいつも手紙を送るなど優しい人だと思っていましたが、戦役で行った朝鮮でも珍しい草花にも心を配る人柄だったのでですね。

「陶工が最初に来たのは、栗野だった可能性がある」ということも驚きました。私の常識では陶工は串木野に上陸し、美山で窯を開いたと思っていました。日本の商人も朝鮮各地に出入りしていたことや、「ひとあきない」まであったこと、そして、朝鮮出兵で5、6万人もの朝鮮人が日本に連れてこられ、薩摩にも1万人がいるとの記録があるなどは初めて知ることでもう驚きの他ありません。この④で知っていたことは「猫神」のことくらいです。

以前、仙巖園を訪ねて、写真も写してブログにも書いていますが、ここにその猫神の写真を添付します。

文禄慶長の役1592年、義弘一行は猫7匹を連れて朝鮮に渡ったが5匹は死に2匹は生還したそうです。猫を戦地の各地に配置し瞳孔などで時刻を知ったとのこと。現在、6月10日の「時の記念日」には毎年欠かさず時計商組合がここに集まって祭典を行っています。

クマモト タツオ

●隈元さんよく、勉強されておられますね。

今度の島津義弘朝鮮出兵 あなたのコメントありで 非常に 興味深く 読んでいます。

玉龍高 裏の 福昌寺の写真 きれいに 整備され 懐かしく 拝見 今後共 よろしく お話 期待しています。
ありがとうございました。木場 祥雄

○ 義弘朝鮮出兵の③に対するコメントも書かないうちに今日はもう④の薩摩焼や「ヤスネコ」の話になってしまいました。遅ればせながら③に対することを少し書いてみたいと思います。

それ以前の話として、大石くんのメールにあったように昨日、一昨日は帰鹿した古市さんと行動を共にして、大いに楽しんできました。

一昨日は八期鹿児島有志で古市さんと簡単なランチ会をしました。場所は錦江湾を望むドルフィンポートの森くんお勧めの一軒です。

その後、皆と別れて、古市さんと私は森くんの車で母校の後ろにある福昌寺跡の島津家墓地までおくってもらい、最高の天気恵まれる中を島津義弘の墓標など見ながら散策しました。私たちの他には人っ子一人もいず、静かな佇まいです。写真添付します。

さて、朝鮮出兵の件です。

大石くんが問いかけている「新聞や徳永和喜氏は忠恒びいきか？」については、私も勉強不足で答えは出ません。忠恒は武家の息子とはいえ、久保が朝鮮で病死するまでは、3男坊として比較的自由的な立場で、やんちゃだったのでしょう。しかし、藩主になってからは義弘が心配して手紙にも「酒と女には注意するよう」と書送ったほどだったようです。まあ歴代藩主最高の32人の子供をもうけたといいますがからむべなるかなとは思いますが、しかし、どうなのでしょう。「地位が人をつくる」という言葉もありますから、案外本来持っている才能が開いたと見えなくもないですね。もっといろいろ調べてみる必要もあるかもしれません。

クマモト タツオ

●いつもありがとうございます。

太閤検地、面白いひっかけですねたしか、自力で開墾した土地も検地で所有を公認すると言って行ったが後にそうではなかったとか。

「此の寸を以、六尺．．」は量衡の統一、天下統一の証でもある。

秦の始皇帝は即位すると、車の轍の幅、質量の基準分銅を定めて、天下に示した。

徳川家康は1603年、江戸入府の折全国を東西33カ国に分け西は神善四郎、東は守随彦太郎に度量衡(さし・ます・はかり、つまり、物差し・升・秤)の管理を委任した。

検地を行えるということは権力者の地位が確立されたことを示すものでもある。

蹴鞠は、祇園で遊んだ大石内蔵助に似たりということでしょうか？

●豊臣秀吉が東アジアを再編しようとして、朝鮮と明を手に入れ、明の征服後には、天皇を中国に移そうと考え、自分は中国・寧波に入ろうとしたことなど奇想天外のことだと私は思う。特に朝鮮出兵について海音寺潮五郎がそのようなことを「秀吉は急速に耄碌していたと断ぜざるを得ない」と書いているというが、耄碌していたのであれば、当時の日本にとって悲劇であったと思う。同じように直木賞作家の白石一郎もその著「戦国武将伝」で「無残な殺戮をくり広げただけで南の益もなかった朝鮮の役は、秀吉の老いの象徴だったかもしれない」と書いている。為政者は耄碌であれ、思い込みであれ、人民を途方に迷わすことは日本の歴史を見ても枚挙にいとまがないから、逆に普通のことだったのかもしれない。しかし、悲劇は悲劇である。巻き込まれる人民こそ大迷惑である。豊臣秀吉は中国との関係が深かった琉球も我が物にすべく、島津氏の「与力」（従属する下級武士の地位）としたが、琉球は兵役ではなく、費用を負

担させることで落着した。しかし、それ以降、兵役も拒否したので、そのことが後の1609年の琉球征討に発展していく。

⑤の中で、私がかもっとも関心を持ったのは、義久の家臣に明国人の医師・許三官や郭国安（汾陽理心）（かわみなみりしん）などを亡命明人として抱えていて、彼らが明に朝鮮出兵の情報を流していたということである。昨年、森くんと冷水町の興国寺を訪ねた時に、その汾陽理心の墓を見ていたからだ。そのことは、「クマトツ1847」ブログ2018年6月27日に書いているが、汾陽理心の一族は「占い」などをよくしたが、理心は許三官の弟子でもあった。その「二人は明側に朝鮮出兵の情報を流した上、明と義久が協力して秀吉を討つ計画を提案していた」というに至っては、何をか言わんやである。義久の差し金があったのかはわからないが、これも奇想天外なことである。このことに関し、桐野作人は「明が島津に打診した秀吉討伐計画の全貌とは？」でその詳細を書いているので、添付します。合わせて興国寺の汾陽理心の墓標も添付します。

クマトツ タツオ



●クマトツさん

西山です。

汾陽理心まで、辿り着く踏査 大したものです。

秀吉は、当時60歳くらい、耄碌もあつたでしょうが朝鮮へ明へ、そして天竺へ行こうとしたでしょうがその前に天国に行っちゃいました。

死後、直ちに挑戦撤兵を決めるほど無茶な戦を秀吉存命中は、諫言できなかったのは側近にイエスマンばかりであったのでしょう。

現代の状況を見ても、あつてはいけないことが巨大な組織内部で起こっています。

最大権力者の周りに自己保身と自己利益に汲々としている人たちが群がっているようです。

最大権力者もそのような輩を周辺に置きたがるようです。

亡国への序奏がかなでられ始めているかもしれません。

ラグビーで日本チームの予想を越える活躍もそのような感を強くします。

日本チームが優勝したら本当に番狂わせでしょうね！

●10月3日6時 クマトツ

「石曼子渡海録 苦難の朝鮮出兵」⑥は島津義弘の武勇伝？ として伝わる二つ（慶長の役、島津の退き口）の内の慶長の役・泗川（さちょん）の戦いである。

慶長2年（1597）7月小早川秀秋を総大将とする軍勢が釜山浦に上陸した。同年8月、秀秋は左右の2軍に分け、慶尚、全羅、忠清の三道へと攻め込んだ。左軍は宇喜多秀家が大將を務め、島津義弘等諸大名が従った。軍勢は、さらに慶尚右道から南原へと進軍した。島津義弘らの軍勢は慶尚道固城を経て、同年8月5日に露梁へと至った。日本軍が南原に近づいたため、朝鮮軍は南原城の守りを固める。朝鮮軍は日本軍に会談を申し入れるが南原城の開城が目的の日本軍はこれを拒否する。同年8月6日、日本軍は南原城を攻撃し、城は陥落した。一連の戦いで多くの朝鮮人が捕らえられ捕虜となった。その中に島津氏が捕らえた捕虜や陶工が薩摩へ送りこまれ、陶工は苗代川に集められ、薩摩焼を始めるようになったのである。

同じ慶長2年10月28日、義弘は泗川古城に入るが、後に泗川の戦いの場所となる泗川新城（泗川倭城）を築く。もちろん島津だけでなく日本から行った各武将もそうしたのであろうが、ほぼ日本の城と変わらないようなものを短時日の間に築いている。

明・朝鮮軍との戦いで、ここに押し寄せた明の兵4, 5万人を相手にした島津軍は今日の新聞では5~8千人。ただ日本史学者・渡辺大門氏は島津軍1万人とも書いている。いずれにしても圧倒的に兵員が少ない中で、大勝利を治めた。そのことが文禄の役では「日本一の大遅陣」と言われた島津氏が日本でも大きく評価され、朝鮮では「鬼石曼子」と恐れられる基となるのである。この「泗川の戦い」については書ききれないほどにいろいろ言われているので、興味のある方は調べてみると面白いと思う。

クマモト タツオ

●大石さん

こんにちは

いつも ありがとうございます。

薩摩藩の 明治時代の 偉人の方々が 大久保さんの福島 大山さんの栃木 開発に携わり 地域の方々から 尊敬されておられることが解りました。

四国旅行の時に 古市さんが 大久保さんのこと？ で 南日本新聞に 投稿され、 今だ？ 記事になっていない？ とか 聞きましたがその後 どうなっているのでしょうか？

八期会 1組の 村上 久幸さんは 栃木県 那須高原の 牧場 に 長年 勤められたとか 聞いていますが 薩摩藩 偉人が 関係されたところ と 関係あったのでしょうか？

次回も 楽しみに しています。 木場 祥雄

●いつもありがとうございます。

薩摩、鹿児島と言えば、ただ勇敢なお人よしのように思われているかもしれないが心優しい人情に溢れた人が多い。

惻隱の情もあり、民政に寄与されたことだと思う。

さて、海戦が行われた場所にほど近い、南海島の直上の鎮海湾は、東郷平八郎が率いる連合艦隊がバルチック艦隊の到来を待ち受け待機して場所である 西山 和宏

●この⑦に対する私のコメントは届きましたか。

大石くんからこのメールをもらってから、書き始めて、途中で「下書き」で保存した間に、西山、木場両君のメールが入り、その後、「下書き」を継続で書いて、送信？ したつもりが、「下書き」が残っていました。このコメント以外は書いた覚えもないので、もう送信したと思って「下書き」を消してしまったのです。もし届いていなければ、もう一回書く事になります。 クマモト

●泗川（さちょん）の戦いで武勲を挙げて、文禄の役の「日本一の大遅陣」と言われた汚名をそそぎ、逆に五大老や名だたる武将らから大きな評価を受けた島津軍であったが、慶長の役での退却までには、なおいろいろな障害を乗り越えなければならなかった。

慶長3年（1598）10月2日、小西行長らが籠る順天城を明・朝鮮連合軍は海陸から攻撃した。この激しい攻防戦は8日まで続いた。この戦いでは水軍は城に登るなどしてまで奮闘したが、陸軍は戦闘意欲もなく、和議を結んで撤退しようとおもっていたようで、そのまま撤退してしまった。

10月8日、五大老からの使者が泗川新城に到着し、明・朝鮮と和議を結んで撤兵するように義弘に伝えた。使者は順天城にあった小西行長のところにも行き、その旨を伝える。10月13日、明軍の参謀が泗川新城に来て和議を乞うたとき、小西行長らも同席して和議が成立した。

日・明の講和は結ばれたものの、この記事にもある李舜臣は、このまま日本軍の撤退を指を加えて見過ごすことに耐えられず、小西行長らの帰路を封鎖する作戦に出たのである。それがこの記事にもある「露梁の海戦」である。

島津義弘らは露梁津からどうにか退いたものの、潮に流されたり、船の衝突などで南海島に上陸した500人くらいが取り残される事態が起こった。

困難の中、義弘はこれらの兵を救出しようとしたが、運搬途中で釜山に逃げ出す者もいた（後に捕まり首をはねられるが）がどうにか救出することに成功した。途中島々を渡った島津の一行は釜山浦に到着する。しかし、10月晦日に打ち合わせていた諸将が釜山浦で落ち合って吉日を待って日本に凱旋しようとしていたことは守られておらず、日本軍は我先にと日本に帰ってしまっていた。ただ、佐土原城主の島津豊久（義弘の甥）だけは義弘親子を待っていた。そして11月24日、釜山浦を出航し12月10日筑前博多に到着したのである。

それより前、慶長の役の最中の慶長3年（1598）8月18日、太閤秀吉死去により、義弘たちが帰った日本は、再び政権をめぐる不穏な空気が感じられるようになっていたというのが次回どのように発展していくのか。また薩摩では島津忠恒（のち薩摩守家久）が重臣・伊集院幸侃を伏見で惨殺するという事件が起こり、それが「庄内の乱」となっていくが、その辺をどういう取り上げ方をするのか楽しみ待ちたい。

本稿は 山本博文著「島津義弘の賭け」

、歴史人「薩摩島津家 最強の真実」等を参考にした。

クマモト タツオ

●いつもありがとうございます。

なんだかんだ言われても大久保利通は明治維新の大なる功労者である。

さて、長澤鼎（磯永彦輔）が薩摩藩英国留学生の1人として英国に渡ったのは13歳（留学生12名中最年少）のときであった。

英国から米国へ移り、「サクセスワイン」ブランドでワインをヨーロッパはもちろん、日本にも輸出した。禁酒法が施行されたときには、大打撃を受けたが13万ガロンのワインを10数年貯蔵して禁酒解禁になったとき放出し巨利を得た。

長澤鼎の名は薩摩を出るとき変名として藩主から賜ったもの。

その後もこの名を使い続けた。

明治末と大正末、2度帰国、昭和9年、フォンテングローブの自宅で83年の生涯を閉じた。

西山 和宏

●大久保利通の鹿児島での一般的な評価はとかく西郷隆盛との政治的な立ち位置の違いから起こった（これも違うかもわからないし、そう単純なものでもない）西南戦争のことだけでなされていると思います。そして、政府軍が西郷をいわゆるやっつけたことが、薩摩人の気質に障ったためのようと思いますが、どうでしょう。いわゆる判官びいきみたいな気持ちからだと思いますがどうでしょう。

しかし、古市さんが福島まで行っていろいろ見聞されたように、美田を残したり、今日の記事のようにブドウ酒造りを勧めたり、殖産興業や旧士族への授産事業だったりに力を注いでいます。その辺をもっと広めていくことが大事でししょうね。そこが肝だと思います。

クマモト タツオ

● 古市さんと先日、福昌寺跡の島津家墓地を訪ねました。 10月5日 2時

そのとき、写したつもりだった「持明院さあ」の墓碑の写真は実際は写していなかったのですが、島津義弘等の墓標があった

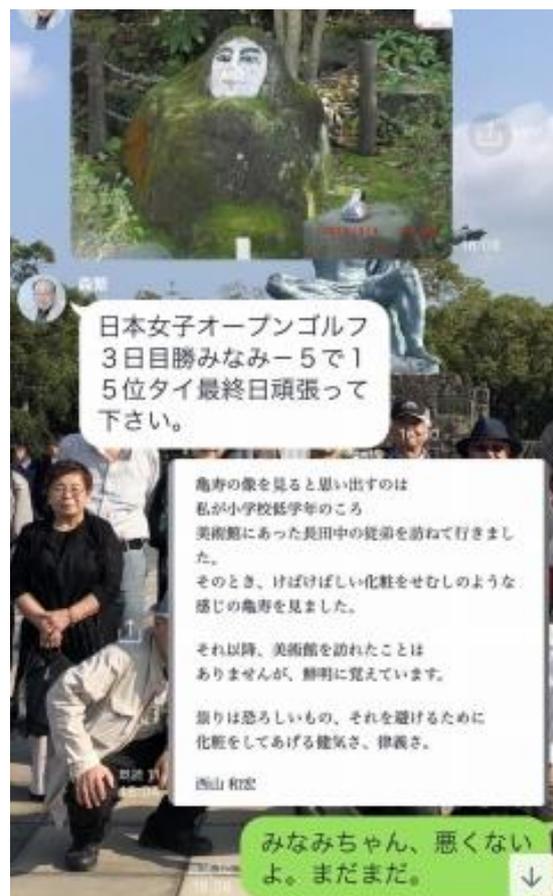
コーナーの一番左端にあって、私が説明をしたと思います。そのとき、持明院さあの石造物が美術館の庭にあって、毎年化粧直しをしていますと言ったと思います。

持明院さあは、ご存知のように島津義久（4兄弟の長兄）の3女で名は「亀寿」、島津義弘（4兄弟の2番目）の次男・久保の正室となるが、久保が朝鮮の役に出陣中病死したため、久保の弟・忠恒（後の家久・第18代当主）の正室となる。しかし夫婦仲はよくなかったそうである。通称は亀寿、持明院様（じめさあ）。つまり、久保、忠恒とは従兄妹どうしであった。

その化粧直しが4日にあったらしくてタイミングよく今日の南日本新聞に掲載されましたので、記事を添付します。

なおもう一枚は過去に私が写したものです。福昌寺跡の墓碑の写真は次回行ったとき写してきます。

クマモト タツオ



●クマタツさんありがとうございます。

亀寿の像を見ると思い出すのは私が小学校低学年のころ美術館にあった長田中の従弟を訪ねて行きました。

そのとき、けばけばしい化粧をせむしのような感じの亀寿を見ました。

それ以降、美術館を訪れたことはありませんが、鮮明に覚えています。

崇りは恐ろしいもの、それを避けるために化粧をしてあげる健気さ、律義さ。

西山 和宏

●10月5日

ありがとうございます。

皆さんじみよさあにはそれぞれ思い出があるようで、子供の頃のことを、また遠くの人には鹿児島を思い出してもらって、メールを書いた甲斐がありました。大石くんが全国に発信してくれて嬉しいことでした。

みなみちゃん、先週に続いてがんばっています。明日に期待しています。

クマモト タツオ

●10月7日・「庄内の乱」と「新納忠元」 大石

「苦難の朝鮮出兵8」でこのシリーズも終わり。次回からいよいよ天下分け目の決戦「関ヶ原」1600年。義弘66歳です。

あの時もし家康に請われて伏見城に入っていたら歴史は変わっていたかもしれませんね。いくつかの「もしあの時」が重なる。

歴史に限らず今でも我々の身に降りかかっています。

●「庄内の乱」の元となった殺し殺された島津忠棟と伊集院幸侃とは先祖を一つにするものであり、ものの哀れを感じるが、この時代には避けられないことでもあったのだろう。系図を紐解いて見ると、伊集院家は、島津家二代当主・忠時の五男・忠経を始祖としている。忠恒は十八代当主なのである意味では他人同然ではあるが、由緒のはっきりした家系だからそのあたりは、両家ともわかった上のことではあったろう。親子、兄弟同士の殺戮ですら当時も事例は多く、現在も残念ながら日常茶飯事のように起こっているのも不思議なことではない。

それより前、太閤検地により伊集院幸侃が豊臣政権から与えられた庄内に与えられた8万石という領地が、島津義久、義弘にそれぞれ与えられた10万石と比べても遜色のないものだったことや、石田三成と密接な関係があったことなどで、権勢を振るったことが忠恒にとっては面白くなかったのではないかと。問題はそれが忠恒の単独犯行なのか、その後ろに義久や義弘の影（意向という言いすぎか）があったのかどうかである。このことは以前にも書いたかと思うが、義久も義弘も影にいたという見方や、少なくとも義久はいた、という見方などがある。（山本博文 島津義弘の賭け） 私は義久はともかく義弘は石田三成（豊臣政権）とも近かったことや、親が殺されてのちに「庄内の乱」を起こす伊集院忠真（ただぎね）の舅（義弘の娘・御下が忠真の妻）であったことなどから、そこはなかったのではと思うがどうだろう。

京都伏見において伊集院幸侃を殺された嫡男・伊集院忠真は、ただちに一族郎党を集め、都城に立てこもり、周囲の12外城を固めたとされる。

義久軍と伊集院軍との攻防には義久には名だたる家臣が参集し、また伊集院側にも飢肥城主・伊東祐兵など周辺の大名家が援助慶長4年（1599）3月9日、幸侃が殺されてすぐ、義久は忠真の庄内領地内との通行を断絶した。

そして6月には庄内に向けて出兵、翌年3月19日、忠貞が都城の城を退去するまで9ヶ月の攻防となった。結局、忠恒は自力で屈服させられず徳川家康が仲介の手を差し伸べてやっと決着をみたのである。その後、忠恒は頼娃に2万石を与えられ所替えとなる。しかし、同年8月17日、日向野尻で鷹狩りに行き、帰るところを誤射という形で狙撃されて生涯を終わった。なんとという悲劇か。

キャパがいっぱいになったようで「おかしなサイン」が出るのでここまでにします。皆さんにうまく届けばいいのですが。 クマモト

●クマタツさん 10月7日4時

詳細な記述、解説 ありがとうございます。

なまじの出世は、とかく禍のものようです。 西山 和宏

●いつもありがとうございます。

「手打ちの理由は、今もって謎だ」先行き不都合なことになりそうなら禍の種は小さなうちに、摘んでしまえということでしょうか？ 陳腐な表現だが、権力闘争は今も昔も変わることなしでしょう。 西山 和宏

● 新納忠元とは (ニイロタダモトとは) [単語記事] - ニコニコ大百科

新納忠元は興味深い薩摩武士ですネ。髭がユニーク。

<https://dic.nicovideo.jp/a/%E6%96%B0%E7%B4%8D%E5%BF%A0%E5%85%83>

<https://dic.nicovideo.jp/t/a/%E6%96%B0%E7%B4%8D%E5%BF%A0%E5%85%83>

●情報ありがとうございます。

いやいやここまでの人物とは知りませんでした。島津忠良に仕えたのには驚きました。

●10月7日5時

今日の記事にある高野山奥之院にある島津墓地の「高麗陣敵味方戦死者供養碑」には、八期旅行のとき、奥之院の途中から入ったので行くことが叶わなかったが、あのとき無理してでも行けば良かったと思ったりする。

⑧の最後にあり、大石くんも取り上げている「伏見城在番」の問題と「義弘は何故、西軍についたか」は諸説あって最終章の大きなテーマだと思うが、これがどういう形で取り上げられるのか、待ち遠しい気がする。

大石くんが取り上げてくれた「鹿児島風土記 新納忠元も奇しくも「庄内の乱」に参戦している。義久軍として新納忠元は川田大膳と共に日向むかさの外城に配置されている。現在も忠元の名は伊佐市(旧大口市)の忠元公園として残り、鹿児島県を代表する桜の名所として春には大賑わいである。私も義兄が鹿児島銀行在職当時大口支店に勤務し社宅が忠元公園の真下にあったので、2, 3回花見に行ったことがある。 クマモト

●10月7日pm9:00

当初、家康に伏見城に入るように要請されて、伏見城に行ったがそんなことは聞いてないと、門前払いで締め出された。

家康の連絡ミスは迂闊であったが、鳥居元忠の聞いてない者は城に入れるわけには律義さは立派。

この線を外すわけにはいかないでしょう、と言ってこの線を通すと平凡だということになる。

そこで、どう一ひねりするのを楽しみにしているということでしょうか？

ところで、最近、いい加減というか、でたらめなことを書いた本が、編集者不足と経費削減で増えていることが問題になっています。 西山 和宏